

2024年度 なみなみ団 能登半島地震被災地支援活動報告書

(1) はじめに

2月以降、災害支援活動を通じて、現地の民間団体や地元住民とのつながりを作ってきた。当初予定していた第三者介入ワークショップやスパイスカレー作りワークショップの実施に向けて計画を進めていたが、9月に発生した豪雨災害によって現地は再び甚大な被害を受け、ニーズや状況も変わり、計画の変更を余儀なくされた。そこで今年度は、①ジェンダーの視点を持ったメンバーによる、主に男性をターゲットとした避難所でのカフェ運営と、②ジェンダーの課題に関する聞き取りに重点を置いて活動した。

(2) 現地での活動内容

①“コーヒー”を用いた、主に男性をターゲットとした避難所でのカフェ活動

10月、現地住民とのつながりを生かして珠洲市内の避難所にてカフェを実施した。一般的に居場所やコミュニティ活動への参加に後ろ向きであると言われる男性を主にターゲットとし、京都の自家焙煎コーヒーをハンドドリップで提供した。2時間で30杯以上を提供することができたほか、スタッフが共にテーブルを囲み、被災された方同士で、被災後の経験や生活、これまでの人生に至るまで、ざっくばらんに話すおしゃべり会となった。避難所の代表者からは、炊き出しなどとは違い、カフェで、なおかつコーヒーをメインとしたことで、普段参加がみられない男性の参加があったほか、ただ目的なく集える“たまり場”を作れたことがよかったとの声があった。今年3月にも再度同じ場所でカフェ企画を実施し、継続した関係を作る予定である。

②現地住民に対するジェンダーについての聞き取り調査

支援活動を通じて繋がった現地住民2名に、能登半島におけるジェンダーの課題について聞き取りを行った。避難所の運営に関わる男性からは、避難所生活の中で、女性に炊き出しや家事の負担が偏っていたこと、その中で多くの女性が理不尽な思いをしていたことが伺えた。

また、地域に暮らす30代女性からは、能登は三世代同居が多く、その中で祖父母の世代に残る家父長的な権力関係を子の世代に引き継ぎたくない、と強く感じている親世代が増えていることなどが聞き取れた。現地で活動する特に若い世代が、この震災を単なる喪失ではなく、ジェンダーを含むあらゆる規範を変える契機としてとらえていることがわかった。

(3) 関西エリアでの情報発信

能登半島地震においてとりわけ問題になったのは、被害状況についての報道の少なさである。そこで当団体が拠点とする関西エリアにおいて、能登の状況を伝え、考える機会を増やすべく、9月・10月に兵庫県尼崎市のシェアスペースにて「差別」なシーン、あなたならどうする？2DAYS第三者介入ワーク

ショップ〜ジェンダー編〜」を開催し、能登半島で実施する予定のワークショップのトライアルの場にしたほか、能登でこのワークショップをどのように広めるか？についても考える場とした。また、2月に京都市内にてチャリティーイベントを開催し、能登の名産品を使った飲食提供を行った他、能登のボランティア活動についての報告会を行った。

（４）なみなみ団活動記録（2024年度）

第一次派遣：2024年5月2日～6日

輪島市、珠洲市を中心に、住宅の片付けボランティアおよび支援者とのネットワーク構築

第二次派遣：2024年9月14日～17日

珠洲市を中心に住宅の片付けボランティア、支援者とのネットワーク構築、および被災者へのヒアリング調査

第三次派遣：2024年10月12日～14日

珠洲市内の避難所においてカフェ活動および被災者へのヒアリング調査

第三者介入ワークショップ：2024年9月7日、10月5日

兵庫県尼崎市において第三者介入ワークショップを実施

チャリティーイベント・ボランティア活動報告会：2025年2月11日